146

想研究資料　第六輯

戰爭の危機とナチス獨逸の經濟力

國際思想研究所

代表　水島　齊

謹啓益々御清適奉賀候、陳者小生儀昨年七月退院後は健康舊に倍し更生の意氣頗る高く、使命遂行に邁進致居候殊に日支事變勃發以來は吾研究所の全機能を擧げ、日夜微力を盡しつゝ有之候處遂に過勞に起因する視力の異常を來し候、洵に不甲斐なき次第に御座候、就ては暫く研究及執筆も絕對に許されず只管加療休養するの已むなきに立到り申候、時局重大の際只々殘念に存居候、從て本資料の上にも多少不備を來す場合も有之ると存候へ共右御諒察の上暫時御容赦賜度御願申上候

敬白

十月廿三日

國際思想研究所に於て

水島 齊

本資料既刊の分

目次（昭和十二年十一月一日 第六輯）

特輯豫告

一、世界の將來

一、肯定的宣傳の必要

再び本書に就て

一、單なる、直譯の羅列ではない。

一、國體觀念に立脚せる見解を以て、解明し批評し、且つ創生的獨自の意見を以て、世に先驅し世を啓蒙し或は、現代及び將來に對する暗示を與へんとするものである。

一、量の多きを排し、寧ろ極力壓縮を加へ簡潔短章に努むるものとす。

戰爭の危機とナチス獨逸の經濟力

一、原料資源の準備はどうなつてるか

原料資源の準備なる問題は大戰前と今日とでは非常に違つた態様を持つてゐる。實際に於て一九一四年前に於ては、原料資源の中央統制を行ふべき國家機關は存在しなかつた。即ち、いざ戰爭となると一切の必要な資源の供給は、國家との尨大な契約に基づいて動く、私營の企業會社の手に依り行はれねばならなかつたのである。然し戰爭が始まるや否や、現實の前に兜をぬがなければならなかつた。そんな制度では到底間に合はず障礙の續出となつたからである。「契約などは、何等實効がない。」のであつた。そのため大急ぎで原料資源の中央管理機關を設けなければならなかつた。然しこれも獨逸では未だ生産の合理化が行はれてなかつたので、差したる効果を齎らさな

かつたのである。

ヒトラーは第三帝國を創建するや先づつく〲と次のやうに語つた。「戰爭の準備の問題は平時に於て充分に研究を遂げなければならない。」そして「國家への原料補給は國家自身に依つて組織づけられねばならない。企業家の手に委すべき問題ではない。」と。爾來、ヒトラーは軍隊はその軍事的參謀本部の外に經濟參謀本部を持たねばならぬとした。

右に關聯して有名なトーマス大佐の演說中にはこう云ふことが述べられてゐる。「最近數年間列强諸國は國防の完璧を期するためには、軍事方的と經濟方面とを兼ねる强力な參謀本部が必要だとの確信を抱いてゐる。われ〲は大戰中にはこの事實を無視して來たのだ。陸軍省に軍事經濟局を設置したのはかう云ふ譯である。

「經濟參謀本部は將來非常に大きな責任を負擔することゝならう。絕えず軍事的方面の要求と經濟的の實力とを較量してその適確な判斷を報告しなければならないのであ

る。」

而して近來の航空戰の進歩に依つて國境地帶は著しく危險にさらされることゝなつた結果、この地帶にある生產中心地を他へ移轉することが既にはじめられてゐる。

却說獨逸の原料資源の現狀は一體どうなつてゐるか。

獨逸は確かに石炭と鋼鐵についてては自國の需要量以上の生產を行つてゐる。然し將來の戰爭の神經とも云ふべき石油は、自然的な資源を殆ど持つてないのである。

獨逸が石炭の液化に依る合成石油の生產に大童となつてゐるのはこれがためである。その石油消費總量は一九三六年の調査では五百十萬噸と見積られてゐる。ヒトラー總統はかつて獨逸は一九三七年末になれば石油の自給が出來るやうになるであらうと揚言したことがある。然し現狀に照してそれは疑はしい、最も都合よく行つたとしても一九三七年末までに平時に於て必要かくべからざる最低減の需要を充し得る石油を、石炭液化の方法に依つて得ることが出來るに止るであらう。

獨逸の著述家エッチ、スタインベルガー氏は將來の戰爭に於て、英米の如き大國がどの位の石油を消費するかを調査して報告してゐる。一箇年戰爭するに必要な石油量を彼の計算に依つて擧げて見ると次のやうである。（單位百萬噸）

	陸軍	空軍	海軍	生產用	合計
ディゼルモーター油	三、〇	一、四五	―	一、八五	六、三
重油	―	―	一、八	―	一、八
揮發油	二、〇	〇、一	―	一、三	三、四
滑油	〇、五	〇、一五	〇、二	〇、三	一、一五
總計	五、五	一、七	二、〇	三、四五	一二、六五

これと同じ問題に關する獨逸のエム・エフ・フリーデンスブルグ氏の研究に依ると次の如く結論してゐる。

「どんなことがあつても交戰國たる大國の石油消費量は一九一八年當時の二倍乃至三

倍に上るであらう。戰線後方の需要を考慮に入れゝば、年次消費量を最低限一千五百萬乃至二千萬噸と見積ることが出來る。」

約一噸の合成石油をつくり出すのに約四噸の石炭が必要である。從つて一千五百萬乃至二千萬噸の合成石油の生産には六千萬乃至八千萬噸の石炭を持つて來なければならない。すると獨逸の全石炭生産の半分を使つて了ふことになる。現在これだけの石炭の增産を行ふことは獨逸にとつては到底問題とならない。尙フリーデンスベルグ自身から云つてゐる。現在獨逸の石炭準備量では漸く平時の消費をまかなふに足るに過ぎない。然もその消費量が今後あまり急速に增加しないと云ふ條件付きである。

獨逸産業の中現實的に非常な進歩を見せたやうに思はれる分野もあるが、それは僅かに一部門に過ぎない。然もその戰時經濟に對する重要法は之を左右すると云ふやうな大したものではない、即ち紡績業である。化學工業の完成に依つて人造纖維の生産は非常な增大振りを示した。人絹の產額は一九三二年の二萬八千噸から一九三六年に

は四萬七千噸に上昇した。然し特に著い進歩を見せたのは人造羊毛の生産であるが、左の表を見ればよく了解出來ると思ふ。

一九二九年	一、六〇〇噸
一九三〇年	二、五〇〇噸
一九三一年	二、五〇〇噸
一九三二年	三、〇〇〇噸
一九三三年	四、五〇〇噸
一九三四年	七、八〇〇噸
一九三五年	一五、〇〇〇噸
一九三六年	四八、四〇〇噸
一九三七年（想定）	八五、〇〇〇噸

人絹及び人造羊毛の生産は一九三二年には獨逸の紡績品全消費額の五、七七%を供

給してゐたが、それが一九三六年になると一五%に增加した。この分野の新しい進歩のお陰で、獨逸は何等價格の騰貴を來すことなくこれらの生產品の外國依存性を減少することが出來るやうになつた。

以上と反對に鐵の生產、これは戰爭經濟にとつて極めて重大な意義を持つものであるが、今日の狀態は一九一四年當時に比し非常に劣つてゐる。

一九一八年の敗戰の結果、獨逸が大部分の鐵鑛山を失つたことは識者の知られる通りである。現在の生產額は、その消費額の極く少部分を占めるに過ぎない。獨逸の統計に依ると全國の鐵の生產は一九三五年には五百二十九萬噸、一九三六年には六百六十五萬二千噸に上つたと指摘してゐる。所が、又鐵鑛の輸入はこの兩年度に於て一千四百六萬一千噸から一千八百四十六萬九千噸に增加してゐるのである。

獨逸は、大戰前既に鐵を輸入しなければならなかつた。生產額がその全需要量に及ばなかつたからであつた。大戰でロレーンの鑛山を奪はれてから、鐵の輸入の必要は

益々増大した。この獨逸の輸入額の大部分がフランス及びスエーデンからであることは周知の通りである。然し大戰中獨逸は既にスエーデン鐵の輸入が極めて難しく大なる危險にさらされてゐることを知つたのである。

この點についてナチスの著述家エム・エフ・エイゼン氏は次の如く云つてゐる。

「スエーデンの產鐵を自己の手に壟斷獨占せんとする英國の努力、これは獨逸にとつて極めて危險であり、戰時には致命的な打擊をさへ與え得るかも知れない、然しこれはスエーデン鑛山と獨逸の冶金工場との間に長期契約が結ばれたために失敗に歸した。」

獨逸はニッケル、クローム、ウオルフラム、モリブデン、ヴアナヂウムなどのやうな軍需工業部門に於て重大な地位を占める非鐵金屬を代用品を以つて代替することを考へることが出來ない。これがためにそのストックにつとめなければならないのである。

石油や紡績工業について述べた代用品の生産は獨逸にとつて非常な支出の原因をなしたのである。「ドイッチエ・バンク・ウンドゲスコントゲゼルシヤフト」の報告に依ると、石油輸入額は一九三四年度には二億マークでカバー出來る筈であつた。所が政府は自給自足の度を增さんとしたがために、七億即ち輸入に仰いだ場合よりも五億もよけいな支出を必要とした。これで判斷すると一九三六年度に於て合成石油の生產に要した費用は約八億マークと評價することが出來る。又この數字からして戰時このためにどの位尨大な金額を必要とするに至るべきかを想像出來るのである。

然し乍ら代用品製造の發展はその直接の結果として、工業就業員數の增加とその增加しただけの戰鬪員準備數の減少を來した。大戰中に於て既に獨逸の重大弱點の一が兵卒と勞働者との需要に對し同時に應ずることが出來なかつたことにあることが明にされてゐるのだ。

かゝる結果、獨逸が如何に代用品の製造に完璧を期し得るとしても、そのために莫

大な費用を投じなければならないと云ふことが、軍部の大きな苦勞の種となつてゐるのである。この點についてエイゼン博士が、「金は戰爭の遂行のためには最も重要な原料品となるやうに要求されてゐる。」と云つてゐるのは意味深長な言葉である。

二、世界戰爭に於ける獨逸の人的資源

現在獨逸參謀本部の最大關心事は人的資源の問題である。一九一四年乃至一九一八年の世界大戰の經驗からどんな敎訓を得たか。

大戰前獨逸の義務的兵役制度は他の多くの國と同樣であつた。ところが、獨逸は四十五歲迄の國民を動員しなければならなかつた。ずつと以前に二年間の兵役の義務を果した各階級の國民を狩り出さなければならなかつたのである。戰爭の初期に於ては三百五十萬人が動員された。而して失業者の數は一九一四年の三月から六月までの間には漸く二・八%に止つたものが、その年の九月になると二八・七%に增加し、十一月には八・二%に下降した。

人手の不足と云ふことは一九一六年に入つて例のヒンデンブルグ計畫を實施することゝなつた際始めて感じられるやうになつた。戰爭の最初の二年間內に於ける失業者數の增加と云ふ現象は、平時生產制を戰時生產制に變更するために確固たる計畫がたてられなかつたことに原因するものであつた。かるが故に改造期を通じて一切の工場が全能率を擧げて操作することが不可能だつたのは已むを得ない次第であつた。

戰爭の初期に於て、銃後では軍需工業のため數百萬人の人間を必要とした。然し乍らこれもやがて多數の婦人を動員しなければ足らなくなつた、十人以上の雇人を使用する企業について見ると婦人勞働者の數は次表に示すやうな仕末であつた。

	一九一三年	一九一八年
鑛山及び金屬工業	一五、九六九	一〇九、六二二
機械工業	六一、九九三	二三一、七七三
器具及び機械工具	七四、六四二	四九三、三七四

二六、七四九　二〇八、八七七

所がこうして婦人勞働を工業に動員し、又捕虜の强制勞働を行ひ、六十歲迄義務的勞働年限を延長してみても、勞働力の不足のため、戰線から呼び戻された人間の數は一九一八年末に於て二百五十萬人に及んだ。

三、現時に於ける獨逸の人的資源

獨逸では一九三五年になつて漸く義務的兵役制が公式に復活された。然し復活前の數年間既に秘密にこの制度が存してゐたのであるが、これを考慮に容れるとしても、一九〇〇年乃至一九一三年生れの壯丁は、大戰前の兵役免除者の敎育に比べてもまだ見劣りのする位の敎育さへも受けてゐなかつた。參謀本部は全歸休勞働者の正確な統計を作ることに努力を傾けた。かくて緒戰數箇月間に生産能力の破壞を導く怖れのある失業狀態の發生を防止し、又各工場の要求する勞働人員數を最少限に止らしめるやうに望んでゐるのである。

以上に關し、獨逸が婦人の活動について抱く新しい考へは極めて注目すべきものがある。ナチスが政權を獲得した際には、數百萬に達する大失業群をかゝへてゐた。この時ナチスが婦人の占むべき場所は家庭だと叫んだことは確かにこの失業群を解消せんとの目論見にあつたのである。かくて獨逸の婦人は男性失業者群のために自分等の職場を放棄したのであつた。現在われ〳〵はこの方面についてのナチスの政策に於て全く前と正反對な轉換を見てゐるのである。實際に於て、武器をとり得る男子を最大限に動員せんと欲するならば、生産方面に於ては婦人を以て男子にかへることが必要である。然しこれらの婦人の工業的訓練は、一九一四年乃至一九一八年當時の如くに戰爭の眞最中に着手しても駄目である。近年再び婦人工場勞働者の數が増加して行くのはこう云ふ理由に依るものと見なければならない。參謀本部は更に、戰時生産のため特設される準備工場に優秀な婦人熟練勞働者を養成せんと考へてゐるのである。

尙一般に工業勞働者の素質向上のため、尠からざる努力が注がれてゐる。

事實、世界經濟恐慌の結果、獨逸には優秀な職能を持たないものが青年層のうちに多數存在してゐる。平時の今日、獨逸の軍需工業はこの問題を痛感してゐる。參謀本部は、いざ戰爭となつた場合にこの熟練勞働者の不足に一層苦しむのではないかと憂慮してゐる。この問題について論ぜられたものは相當あるが、その中伯林大學教授たるヘッス將軍の論文は最も注目すべきものゝ一つである。

「熟練勞働者が不足し、然も二年の義務兵役制を布くやうな國では次のことが必要である。工業に必要缺くべからざる熟練勞働者や技師に對しては、一箇年の兵役終了後六箇月の休暇を與へ、之を舊職場に就かしめることである。そしてこの六箇月の休暇就業の後再び軍隊に歸つて、第二年目の殘り半分の兵役を了すればよい。又同樣に農業關係に必要な優秀勞働力についても、兵役第二年目の夏期六箇月間、これを田園に歸すことが必要であらう。かうすれば次の三つの目的が同時に達成出來ると云ふものである。即ち、工業作業員組織の實現、優秀勞働者教育の遂行、軍の技術教育の强化

の三である。」

更に又獨逸の人的資源問題について重要性を沒却し得ないものとして心理的な諸因を擧げ得る。大戰前獨逸選擧權者の投票の約三分の一を贏ち得た社會民主黨は從來常に軍事費の協賛を拒絕しつゞけて來た。然しながら一九一四年八月四日遂に社會民主黨百十名の代議士は軍事費を承認するに至つた。

革命的な叫び聲や平和主義者の其の情は戰爭中孤立した小グループの內部にしかひゞかなかつた、大衆の不備が戰爭の犧牲や慘禍とともに增大したことは確かであるがと云つてそれが確固とした政治的な形態をとるに至つたのではなかつた。罷業が起つたことを記し得るであらうが、それもごく短期間で終つた。そして又終には脫走兵が續出したがこれも亦軍事行動の進行に差した影響を與へるまでのことはなかつた。

然らば現在の事態はどんなものか。將來戰爭勃發の際依然ナチスが政權を握つてゐるとしても、果して獨逸國民は、さきに獨逸帝國の指導者の下に一致結束してゐたや

うに、現ナチス指導者達に從つてこの結束を新にするものと考へ得るであらうか。いろ／＼の事柄を考へ合せると國民の大部分は戰爭の場合必ずしも熱意を以てナチスに附隨して行くとは思はれない。反對に現制度に對する反對勢力を增大しようと欲して獨逸の敵に乘ぜしむる機會を與へるかも知れない。特にこのやうなことは既に自由勞働組合を組織し、左翼的政黨を結成した勞働者大衆の場合にあてはまる。

一九三三年の初、獨逸自由勞働組合は約五百萬の組合員を擁してゐた。ナチス政權獲得前に行はれた最近の選擧に於ては、社會主義者や共產主義者に對して、十三萬人の選擧人が投票したのであつた。ナチスはブルジョア政黨の大部分の投票者から怪物視されて居り、又尙更のこと勞働者の二大政黨に喰ひ込むことは出來なかつたのである。

爾來既に四箇年餘りを經過した。而して現在世人はかう云ふ印象を持つてゐる。即ち、新しい全體主義國家は一致せる輿論の支持を受けてゐると。然し乍ら數々の徵候

を顧ると決してそうとも云へない。工業勞働者階級が新制度に對し深刻な敵意を抱いてゐる樣子が顯著である。ナチスは政權樹立後數箇月にして、各企業の勞働代表任命のため工場内の選擧を施行した。この選擧に於て、ナチスは正確には全代表數の八分の一しか選出されなかつたのに對し、自由勞働組合は七五%、又キリスト敎勞働組合は赤色勞働組合の妨害があつたにも拘らず一二%を獲得した。この結果はナチスに强い衝擊を與へ、遂に彼等は企業に於ける右の選擧を斷然禁止して了つた。

然しながら一九三四年ナチスは更に工場内に於ける「腹心分子」を選出する方途に出た。所があらゆる彈壓手段が講ぜられたにも拘らず、その結果は全く失敗に歸した。一九三五年四月三十日附「アングッフ」紙にはかう書いてある。「工場内選擧の中五分の三位は選擧をサボタージユした。勞働者は投票用紙にナチ制度に對するいろ〳〵の不滿をあらひざらひ書き立てた。」と。この選擧に於ては獨逸勞働階級の四分の三がナチスに反對であることを示したのである。前述の「腹心分子」の選擧は一九三五年に

も施行されたが、それは前年の結果を裏書するに過ぎなかつた。そして昨年度も同様の選擧が四月の三日と四日に施行される筈であつたが、その間際になつて、ナチスの指導者はその命令を取消した。今年はてんで選擧は問題とされてない。このことは現在獨逸國民大衆を支配する政治的な雰圍氣が何であるかを語る最も意味深い徴候の一つである。然しながらかゝる反政府氣運は獨裁制度の强行と云ふ事實に對して未だ何等直接の表現方法を持つてないことは明かである。たゞその存在は嚴たる事實であり戰時ともなれば、ナチス制度に對し危險な動きとなるであらう、ナチスの指導者達は極度にこれを警戒してゐる。かくてこの問題について一つの研究機關が設立されるに至つたが、その創立者たるハンス・フォン・ウオス大佐の考へでは戰爭に適應すべき新しい國民心理の宣傳に努力すべきであるとしてゐる。ナチスの理論家カール・ビンショヴイウス氏は、この點に關し一著をあらはしてゐるが、その中には、次のやうな注意すべき文言がある。即ち、

「抵抗力の强さは、どの程度まで國民に對し生活の保障を與へ、之を納得せしめ得るかと云ふことに係る。」

これは非常にはつきりしてゐることである。然し乍ら國家主義的な概念はすでに自由主義的勞働組合組織を經驗し、又左翼的大政黨を結成したことのある幾百萬の勞働者を說き伏せるだけの力を持たない。今日反對氣運は潜在してゐる形であるが、ナチスの現制度が全面的にプロレタリア大衆をバックとする必要に迫られ又彼等に對して武器を附與するの餘儀なきに至るならば忽ち積極的な活動力となつて具現するに至るであらう。

結語

ナチス獨逸はその國內狀勢から對外政策の遂行上適用すべき政治的經濟的敎訓を引出すことが出來た。が彼は國境外に自己に對し缺乏品を供給してくれる同盟國を必要とする。これがために獨逸はイタリーの援助を得て小協商國を分散せしめ、その構成

員たる諸國の若干を伯林―羅馬樞軸に牽きつけんと庶幾してゐるのである。獨逸の參謀本部は過ぐる大戰中占領せしめたルーマニア石油資源から覺えた味を忘れかねてゐる。

世界大戰の當初、獨軍の占領した地域の經濟的開發は、軍事行動に附隨した第二義的の結果であつた。然し來るべき戰爭に於ては最早これとは全く別なものであらう。即ち軍事行動の方針は軍需品を補給し得べき新しい要地の占領と云ふ緊急な必要に基いて決定されるであらう。この必要は新しい軍事經濟書の中に公々然と明記されてゐる。即ち、カールハウゼル氏は近著「平時經濟及び戰時經濟の二面より見たる農作地の問題」に於て左の如く述べてゐる。

「過去に於ては、外國の耕作地の地理的分布の問題を單に競爭と云ふ見地から考へてゐたが、今日ではその國が戰時にどれだけの補充的生產を行ひ得るかと云ふことに從つてその種々の經濟的分野の成行如何を研究しなければならない。かくの如く軍事經

濟的見地に立つて考察することに依つて、政治的工作上最も重大な結果を收めることを得るものである。」

自給自足を極限迄押しすゝめ、同盟の相手を探求し、新しく軍事的に捌け口を獲得すること、この三つこそナチス獨逸の新しい經濟政策の根抵を形づくる主要原則である。

昭和十二年十月廿九日印刷
昭和十二年十一月一日發行

第六輯（非賣）

編者兼發行人　東京市麻布區簞笥町六七　水島齊

印刷人　東京市芝區新櫻田町一九　糸川東洋男

印刷所　自由活版所

發行所　東京市淀橋區柏木一ノ四八　國際思想研究所
電話四谷(35)五七八三番
振替東京三三〇一一番

近刊豫告

現代國家民族大觀 第二卷

英・米・露に於けるユダヤ人の策動

四六版 寫眞數葉入百四十餘頁 定價壹圓

世界を席捲するユダヤ人の勢力は、今回の日支事變にまで魔手が延びてゐる。我等はユダヤ人の研究を發表したいがさう容易ではない。本書は先づ一資料として小出しをして見たのである。

終